

〔論文〕

子どもの興味・関心の個別性に対する保育者の関わり —3歳児の砂遊びにおける興味・関心の所在分析から—

貞 松 成
Joe Sadamatsu

大阪総合保育大学大学院
児童保育研究科 児童保育専攻

本研究は、砂遊びに取り組む子どもたちの興味・関心の個別性に対する保育者の関わりを調査したものである。砂遊びに取り組んでいる1人の保育者と9人の3歳児の動画を20人の保育者に視聴してもらい、それぞれの子どもの興味・関心について記述してもらった結果、子どもたちは保育者や友達などの「人物」、泥や水などの「素材」、バケツや砂を型にはめる「道具」の3つの対象に興味・関心を寄せていたととらえられた。3つの子どもの興味・関心について統計分析を行った結果、それぞれの子どもの興味・関心は有意に異なっており、それに対する保育者の関わりについても有意に異なっていたことから、子どもの興味・関心を把握するためには、保育者同士の情報の共有と意見の交換が欠かせないことが示唆された。また、子どもが活動に集中するために必要とする保育者の関わりを「必要」「少し必要」「不要」の3つの必要性に分類した上で、保育者の関わりを「直接的」「間接的」「観察的」「不介入」の4つに分類し、必要性和実際の保育者の関わりについて確認した結果、必要性が「必要」であれば「直接的な関わり」、「少し必要」であれば「間接的な関わり」、「不要」であれば「観察的な関わり」の望ましい関わりは、3歳児9人のうち5人が一致していた。

キーワード：砂遊び、興味・関心、保育者の関わり、個別性、個別最適

1. 問題と目的

子どもの興味・関心を広げたり高めたりすることは、子どもの資質や能力を育む上で重要である。保育所保育指針（2018）は、「子どもが興味や関心をもっていることに着目し、次に何につまずいているかを明確にしてい」、「子どもの自発性や探索意欲が高まるような環境を計画的に構成し、子ども自らが環境に関わろうとする姿を、保育士等は見守り、共感しながら、励ましたり、必要な助言を行ったりする」など、一人ひとり異なる子どもの興味・関心に沿った保育環境を構成することを強調している。同時に、保育士に求められる主要な6つの知識及び技術の1つとして「子どもの経験や興味や関心に応じて、様々な遊びを豊かに展開していくための知識及び技術」にも触れており、知識と技術の必要性についても触れている。保育所保育は集団保育が前提となっており、子どもたちの自発性は集団を通して育てていくが、自発性は自ら進んで行くことを意味しており、まさに子どもの中に興味・関心が芽生えたときに発揮される心の動きである。保育者は、この子どもの興味・関心を集団

の中で見出して着目していかなければならない。そして、子どもが何につまずいているかを明確にした上で、遊びが豊かに展開されるように子どもたちと関わっていくことになる。

1960年代を中心に幼児の集団生活について研究した丸尾ふさ^{注1)}の集団指導計画を整理した穴戸（2017）によれば、集団生活には4つの段階がある。第1期は「集団生活の基調となるリズムを保育者が中心となって作り調べていく段階」であり、保育者がまだまとまりのない子どもたちと同じ生活基盤に立つことで、まとまるために必要となる決まりや言葉を理解させて、一緒に遊び仲間感を育てる。第2期は「集団の中で一人ひとりの要求を大切にしながら、方向づけていく段階」であり、子ども一人ひとりに自分の要求を出させるようにさせるなかで、この集団には自分と同じ要求を持つ子どもが自分以外にもういることを気づかせることで、どうしたら良いかと考えさせて、自主的かつ主体的な生活をつくる。第3期は「子どもたち自身が中心になって活動していくなかで、集団生活の内容を充実させ、整えていく段階」であり、第2期で培った自主性や主体性を当番や共同作業などの集団生活を充実させるために必要な活動に発展させて、協力しなければできない活動を増やし、組織的な行動力を強化する。第4期は「一人ひとりの成長を集団の発展の中で確かめあい、次の発展のエネルギーを育て

大阪総合保育大学大学院
〒546-0013 大阪府大阪市東住吉区湯里6丁目4-26
joe.sadamatsu@gmail.com

ていく段階」であり、クラス集団から一歩進んで、全園的な協同行事などに参加し、これまでの集団生活で培ってきた成長を意識させる。3歳児においては、第1期に重きを置きながら第2期を目指す時期である。つまり、保育者がまとまりのない集団生活を調べて、一人ひとりの要求を出させることを目指す時期に該当するが、このような育ちの段階の中で一人ひとりの発達や興味・関心を把握して、指導のあり方を工夫していくことが大切である。

一斉保育の特徴を持つ幼稚園と自由保育の特徴を持つ幼稚園の計画と実践を比較し、保育者と子どもの主体性を確認した浅川（2009）が、どちらの園にも子どもの主体性が確認されたことを確認したことから、子どもの主体性は保育形態ではなく、保育者の関わり方によって発揮されると言えるだろう。保育者は子どもたちの興味・関心を把握したり、子どもが主体性を発揮できるように環境づくりに努めたりすることになるが、主体性が発揮される集団保育において保育現場がなすべき役割を人間関係の領域に着目して整理した橋村（2022）は、子どもたちの中で気持ちを揺るがす体験が不足していると、自分の意思で判断、決定、表現しようとする主体性や、独立して自ら物事を行う主体的な態度が育たないことを指摘した上で、幼児一人ひとりの特性に沿った保育を実践していくことが大切であることを報告している。しかし、子どもたち一人ひとりの特性に対して、どのように関わるべきなのかについては、先行研究によって見解が異なる。古典的な考え方としては、大人は子どもの活動に介入せずに、子どもが自ら活動を展開していくというものだ（Biber, 1984）。子どもが自分で決めた遊びを展開することで、自らの遊びを追求し、自分の感情を表に出すことができる（Freud, 1961）。また、Harper & McCluskey（2003）も、大人の関与が子ども同士の遊びの妨げになることを報告している。こうした考え方によると、大人は子どもの遊びをよく観察はすれども介入することは望ましくないということだろう。一方で、Bennet, Wood, & Rodgers ら（1997）は、家庭に問題のある子どもに対しては、大人が子どもの遊びに介入することで、子どもの遊びがより発展することを報告している。これらの事例からも、保育者の子どもへの関わりの重要性が窺える。Trawick-Smith, J. & Dziurget, T.（2011）は、8人の保育者と32人の子どもの保育室内でのやりとりを調査し、保育者が子どもの遊びに対して必要な支援のレベルに見合った行動をとることが多かったことを報告している。具体的には、子どもの遊びに対する保育者の関わりの必要性に応じて、「必要」「少し必要」「不要」の3つに分類し、子どもたちへの関わりに

については「直接的」「間接的」「観察的」「不介入」の4種類に分類して相互の関係性を示し、保育者の関わりが子どもの求める関わりと一致した場合は自律的な遊びに繋がるが多いことを示した。

以上のことから、保育者による子どもの興味・関心の把握は必須と言える。一人ひとり異なる子どもの興味・関心がどのように異なっており、保育者は子どもたちの興味・関心に沿ってどのように関わっているのだろうか。本研究では、砂遊びに取り組む3歳児の興味・関心の個別性と保育者の関わりとの関係性を示す。

II. 研究方法

1. 研究対象

3歳児クラスを担当する保育者1人と3歳児9人が砂遊びに取り組んでいる10分間の動画を、同一法人が運営する20か所の異なる保育園の3歳児クラスを担当する20人の保育者に動画を視聴してもらい、それぞれの子どもの興味・関心について記述した自由記述と、実際に保育をした保育者1人による自由記述が研究対象である。本研究は、子どもの興味・関心の個別性に対して、保育者はどのようにして適切な関係性を構築しているのかを考察するものであるが、子どもの発達の違いによって行動に大きな差が生じないように、子どもの年齢は限定されることが望ましい。3、4、5歳児の砂遊びを比較した藤塚（2017）が、3歳児は保育者がする行為を真似ることで遊びが始まり、4歳児になり友達との関係性が広がってくると保育者の存在がなくても遊びが継続し、5歳児になると保育者の介入はほとんどなくても十分子どもだけで遊びを展開することができると報告していることから、保育者の介入が必要な年齢である3歳児を研究対象とした。また、Parten（1933）が、子どもがあらゆる遊びの中で、もっとも砂で遊んでいることを報告していること、そして、角谷・梅川・亀山・渡邊（2017）の報告によると、子どもが「遊びこむ」ことで好奇心や自己統制力が高まる可能性が示唆されていることから、砂遊びは子どもの興味・関心が現れやすい遊びであると考え、砂遊びを研究環境とした。子どもの興味・関心について記述した20人の保育者の平均保育経験年数は5.5年（SD=4.61）であった。動画に登場する3歳児クラスを担当する保育者は、指定保育士養成施設（短期大学）を卒業し、8年の保育経験を有する。

2. 調査期間

本調査は2022年2月から2022年3月に実施した。

3. 手続き

動画の視聴場所は各保育者が勤務する認可保育所であり、事前に動画視聴用のタブレットを各保育者に配布して実施した。20人の保育者が、砂遊びをする9人の子どもが記録された10分間の動画を2回視聴し、それぞれの子どもたちが何にもっとも興味・関心を持っているのかについて理由とともに自由記述した。1回の視聴につき記述時間は15分間であり、1回目と2回目の視聴の間には1分間の時間を設けた。10分間の砂遊び動画の場面は、最初に登場する子どもが砂場に入ってから10分間とした。保育者は動画視聴による省察を行うときは、1回目は保育者に着目し、2回目は子どもに着目することから動画視聴回数を2回とした（著者、2022）。

4. 分析方法

（1）子どもの興味・関心要素

保育者20人の自由記述をテキストマイニングした結果、出現頻度が高い単語の上位10は、砂（95）、泥水（36）、友だち（36）、泥（35）、型抜き（27）、保育者（25）、バケツ（25）、泥遊び（12）、泥団子（12）、友達（12）であった。これらを砂や泥の「素材」（95）、保育者と友だちの「人物」（73）、バケツや型抜きの「道具」（25）の3つに分類し、子どもの興味・関心要素とした。次に、子どもの興味・関心要素に、該当する記述があれば1、該当していなければ0として数値化し、9人の子どもの興味・関心について違いがあるかカイ二乗検定を行った。有意水準は5%とした。テキストマイニングはUser Local社のAIテキストマイニング、分析には統計解析ソフトSPSS（Ver. 25.0）を用いた。

（2）保育者の関わり

保育者の関わりを書き出し、子どもの興味・関心要素別に分類した。「人物」「素材」「道具」に対して関わっていれば、それぞれ1として数値化した。保育者の関わりが、子どもの興味・関心要素別に違いがあるかカイ二乗検定を行った。有意水準は5%とし、分析には統計解析ソフトSPSS（Ver. 25.0）を用いた。

（3）保育者の関わりの必要性

筆者が動画を視聴し、子どもが興味・関心を持った活動に取り組む中で、その活動を継続するために必要とする保育者の関わりを、Trawick-Smith & Dziurgot（2011）に従って、「必要」「少し必要」「不要」の3つの必要性として分類した（表1）。

（4）保育者の関わりの内容と定義

保育者の関わりの内容と定義については、子どもが求める保育者の関わりの必要性和同様に、Trawick-Smith & Dziurgot（2011）に従い、「直接的」「間接的」「観察的」「不介入」の4つに分類した。また、具体的な保育者の関わりについて、Trawick-Smith & Dziurgot（2011）が整理した保育者の関わりは、直接的な関わりが13、間接的な関わりが30、観察的な関わりが2、不介入が6の合計51項目であった。その中から、筆者が本研究で使用した動画の中で該当した事例のみを整理した結果、直接的な関わりが2、間接的な関わりが13、観察的な関わりが1、不介入が3の合計19項目を表2に示した。

a. 直接的な関わり

保育者が子どもに問いかけたり、要求したり、身体的に誘導したり、そのほかの方法によって、子どもの行動を促したり、保育者が子どもに代わって活動に参加する関わり。

事例：子どもが保育者の隣に座って、バケツの中で泥水を作って遊んでいる。時々、保育者に話しかける。他の子どもが集まってくるたびに邪魔をしないように友達を牽制して争いになりかけるが、その度に保育者が制止する。

分類：保育者は、事例の子どもの隣から離れず、争いに発展しそうになる前に仲介している。子どもの自主的な行動を制止しているため、「直接的な関わり」と判断した。

b. 間接的な関わり

子どもが保育者に遊び方を教えてもらおうと求めたり、保育者が子どもの活動を誘導したりすることのない、子どもの意思によって活動に取り組むことができていく関わり。

表1 保育者の関わりの必要性和定義

必要性	定 義
必要	保育者の関わりがなければ、子どもが一人で解決できない活動であったり、友達との争いなどへの危険に繋がったりするなどの場面
少し必要	最初は自ら活動を始めたとしても、それを継続したり、途中で生じた課題を解決できなかったり、友達と交流したりすることが難しい場合に、保育者の関わりによって解決できる場面
不要	保育者の関わりがなくても、子どもが自律的に遊びを発展させ、継続して集中している場面

表2 保育者の関わりの内容と定義

保育者の関わり	定義	具体的な保育者の関わりの内容
直接的	保育者が、子どもに質問したり、身体的に誘導したり、その他の方法で子どもの行動を促したり、保育者が子どもに代わって課題を解決するような関わり	<ul style="list-style-type: none"> ・保育者が不適切と認識した行動を静める ・子どものために争いを解決する
間接的	保育者が、子どもに遊びの内容を求めたりするような直接的に関わりではなく、保育者が子どもの活動を誘導したり、動機を高めたりすることで、子どもが遊びに影響を与えるような関わり	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもが自分でできる遊びを保育者が始めて誘導する ・遊びに使う素材や道具を提供する ・遊びについて質問（会話）する ・子どもの思考や遊びを拡張するための質問 ・遊びを中断させないよう声をかける ・子どもの質問に答える ・子どもと並行して同じ遊びをする ・2人以上の子どもの会話や交流を促進させる ・子どもに仲間に加わって遊ぶように促す ・子どもの不適切な行動を制止する ・遊びを変える指示をすることなく誉めるまたは励ます ・子どもの発言、身振り、行動に反応する ・子どもの遊びの成果について応答する
観察的	保育者が子どもの行動に介入することなく、5秒以上子どもの行動を見守る関わり	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの遊びを観察する
不介入	保育者が子どもと身体的・言語的な関わりを持たず、5秒以上連続して子どもを見ていない遊びの対応	<ul style="list-style-type: none"> ・他の保育者と会話をする ・設定した遊び場以外を監視する ・他の子どもを配慮する

事例：子どもが遊びを見つけられずに砂場の中を歩き回っている。途中から、コップを持って、周りの友達を同じように型抜きをしようとするが、上手くいかず、保育者の元へ近寄る。保育者の促しにより、他の子どもと一緒に泥水を作ろうとするが、拒絶されたため他の場所へ行く。

分類：保育者は、近寄ってきた事例の子どもが、他の子どもたちと交流できるように促したため、「間接的な関わり」と判断した。

c. 観察的な関わり

保育者が子どもの活動に介入することなく、5秒以上子どもの行動を見守る関わり。

事例：子どもが1人で水場の近くで、泥水づくりに没頭している。保育者はときおり砂場から観察している。

分類：事例の子どもは、自分が集中できる遊びを見つけて、砂遊び動画が終わるまで継続的に集中しており、保育者はその様子を見守っていたため、「観察的関わり」と判断した。

d. 不介入

保育者が子どもと身体的にも言語的にも関わらず、5秒以上子どもを見ていない関わり。

事例：子どもは、早々に、遊びを見つけ、砂場の中で自立して1人で遊んでいる。他の子どもと交流するも争いにも発展せずに、良い関係を築くことができる。

分類：保育者は、事例の子どもを見ていない時間が多く、5秒以上の観察もなかったため「不介入」と判断した。

5. 倫理的配慮

本研究を進めるにあたっては、対象となる保育者と子どもの保護者に対して、本研究の目的、調査内容、研究方法、及び研究結果を公表する場合には個人情報には匿名処理される旨について紙面を持って説明した上で同意を得た。なお、本研究は大阪総合保育大学倫理委員会の許可を得て、実施された（承認番号：児保研－043）。

表 3 子ども毎の興味・関心要素別の頻度と割合

子ども	A	B	C	D	E	F	G	H	I	合計
人物	3 (15.8)	12 (48.0)	10 (33.3)	6 (22.2)	4 (25.0)	2 (8.3)	8 (29.6)	10 (41.7)	1 (4.8)	56 (26.3)
素材	3 (15.8)	2 (8.0)	18 (60.0)	17 (63.0)	5 (31.3)	18 (75.0)	15 (55.6)	7 (29.2)	15 (71.4)	100 (46.9)
道具	13 (68.4)	11 (44.0)	2 (6.7)	4 (14.8)	7 (43.8)	4 (16.7)	4 (14.8)	7 (29.2)	5 (23.8)	57 (26.8)
合計	19 (100.0)	25 (100.0)	30 (100.0)	27 (100.0)	16 (100.0)	27 (100.0)	27 (100.0)	24 (100.0)	21 (100.0)	213 (100.0)

Ⅲ. 結果

1. 子どもの興味・関心要素

表 3 に、20 人の保育者が記載した子ども毎の人物、素材、道具の 3 種類の記載数と割合を示した。

表 3 について χ^2 検定を行い、期待度数が 5 未満のセルが存在したためフィッシャーの直接確率計算法を適用し有意差を認めたことから、9 人の子どもたちの興味・関心は、たとえ同じ砂遊びに取り組んでいたとしても子どもたちの興味・関心は有意に異なることが明らかとなったことから、子どもの興味・関心の個別性を示された ($P = .001$)。

次に、20 人の保育者 (a ~ t) が記載した子ども毎 (A ~ I) の人物、素材、道具の 3 種類の記述について図 1 に示した。

本研究における子どもの興味・関心の特定については、3 つの要素の中で記述数をもっとも多い要素を、そ

の子どもの興味・関心とした。20 人の保育者が記述した子どもの興味・関心を表す黒丸 (●) は、人物、素材、道具の 3 つの子どもの興味・関心要素のうち「素材」に集中している (100)。その中でも、20 人のうち 18 人 (90%) の保育者が、子ども C と F は素材に興味・関心があると判断した。同じように、人物に関しては、子ども B に 12 人 (60%) が集中しており、道具には子ども A に 13 人 (65%) が集中している。このように、たとえ同じ活動場面を見たとしても、保育者によって子どもの興味・関心の所在のとらえ方は異なっており、全ての子どもにおいて 100% 合致することはなかった。むしろ、保育者の見立てがもっとも集中した子どもであっても 90% であり、低い場合では 60% であった。一方、保育者の記述が少ない子どもでは、素材では子ども B の 2 (10%)、人物では子ども I の 1 (5%)、道具では子ども C の 2 (10%) であった。以上のように、子どもの興味・関心のとらえ方は保育者によって大きく異なるが、これがどのような結果に繋がるのだろうか。

人物										
保育者	子ども	A	B	C	D	E	F	G	H	I
a										0
b		●	●					●	●	4
c		●	●	●				●		4
d		●	●		●					3
e		●	●	●					●	4
f										0
g								●	●	2
h		●	●							2
i		●								1
j								●	●	2
k		●				●		●	●	4
l		●	●							2
m		●	●	●	●			●		5
n	●		●	●	●			●		5
o		●	●						●	3
p			●							1
q										0
r		●						●	●	3
s	●							●	●	3
t	●	●	●	●	●	●	●	●	●	8
		3	12	10	6	4	2	8	10	1
		3	12	10	6	4	2	8	10	1

素材										
保育者	子ども	A	B	C	D	E	F	G	H	I
a						●			●	2
b		●	●	●		●	●	●	●	7
c			●	●		●	●			4
d			●	●		●	●		●	5
e			●	●		●	●		●	5
f			●	●	●	●	●		●	6
g			●	●		●	●	●		6
h			●	●		●	●			4
i		●	●	●		●	●		●	6
j			●			●	●	●	●	5
k	●		●	●			●			4
l	●		●							2
m	●		●	●		●				4
n			●	●	●	●	●		●	6
o			●	●		●	●	●		5
p			●	●		●	●		●	5
q			●	●		●		●	●	5
r			●	●	●	●		●	●	6
s			●	●	●	●	●	●	●	7
t			●	●	●	●	●	●	●	6
		3	2	18	17	5	18	15	7	15
		3	2	18	17	5	18	15	7	15

道具										
保育者	子ども	A	B	C	D	E	F	G	H	I
a		●	●			●			●	4
b		●	●			●				3
c		●				●			●	3
d					●		●		●	4
e		●	●						●	3
f										0
g		●				●			●	4
h		●				●				2
i		●				●				2
j		●								1
k			●				●			2
l		●			●			●	●	4
m		●					●	●		3
n	●	●			●				●	4
o				●				●		2
p		●	●	●	●				●	5
q	●					●				2
r		●						●		2
s	●	●							●	3
t	●	●	●						●	4
		13	11	2	4	7	4	4	7	5
		13	11	2	4	7	4	4	7	5

図 1 保育者が記述した子ども毎の興味・関心

たとえば、保育者oが考える子どもCの興味・関心は、「素材」でも「人物」でもなく、「道具」である。しかし、他の大多数の保育者は、子どもCの興味・関心は「素材」にあると記述している（記述数18）。もしくは、「人物」である（記述数10）。少なくとも、「道具」ではない。道具と記述した保育者は、保育者oの他には保育者pの1名のみであり、保育者oとpの意識は子どもCの道具を扱った姿に集中していることを表している。同様に、子どもFも素材の記述数は18である。しかし、子どもFについては、保育者kとlが素材としておらず、保育者kは人物と道具、保育者lはどれにも記述はない。実際に、保育者lは子どもFについての記述していなかったため、今回の動画視聴では注意が届かなかったのかもしれない。また、保育者fを例に挙げると、人物にも道具にも記述がなく、記述があったのは素材のみであった。素材以外の記述がないということは、保育者Fの意識は子どもたちが素材に対して心が動いている姿に集中した結果と言えるであろう。一方、実際の保育にあたった保育者の見立てによると、「道具」とした

のはA、B、E、Hの4人、「素材」としたのはF、Iの2人、「人物」は該当なしであった。

以上のように、子どもの興味・関心の対象は、それを汲み取る保育者によって着目点や見解が異なるため、1人の保育者だけでは正確に汲み取ることが難しいことが示された。

2. 保育者の関わりの違い

表4に、保育者が子ども毎に関わった子どもの興味・関心要素別の関わりについての割合を示した。図1が示す通り、9人の子どもたちの興味・関心がそれぞれ異なっていることを確認することができる。表4に示した保育者が子ども毎に関わった子どもの関心要素別の関わりの頻度について、期待度数が5未満のセルが存在したためフィッシャーの直接確率計算法を適用し分析した結果、有意差を認めた（ $P = .025$ ）。

3. 保育者の関わりの必要性和保育者の関わり

次に、9人の子どもたちの保育者の関わりの必要性和

表4 保育者が子ども毎に関わった子どもの関心要素別の頻度と割合

子ども	A	B	C	D	E	F	G	H	I	合計
人物	1 (12.5)	1 (50.0)	0 (0)	1 (8.3)	1 (33.3)	0 (0)	1 (25.0)	0 (0)	0 (0)	5 (11.1)
素材	0 (0.0)	0 (0)	10 (83.3)	10 (83.3)	2 (66.7)	2 (100.0)	2 (50.0)	2 (100.0)	0 (0)	28 (62.2)
道具	7 (87.5)	1 (50.0)	2 (16.7)	1 (8.3)	0 (0)	0 (0)	1 (25.0)	0 (0)	0 (0)	12 (26.7)
合計	8 (100.0)	2 (100.0)	12 (100.0)	12 (100.0)	3 (100.0)	2 (100.0)	4 (100.0)	2 (100.0)	0 (0)	45 (100.0)

表5 保育の必要性和望ましい保育と実際の関わり

子ども	必要性	望ましい関わり	実際の関わり	事例
A	少し必要	間接的	間接的	・遊びを中断させないよう声をかける ・子どもの発言、身振り、行動に反応する ・子どもの遊びの成果について応答する
B	不要	観察的	不介入	・他の子どもへの配慮
C	不要	観察的	観察的	・子どもの遊びを観察する
D	必要	直接的	直接的	・子どものために争いを解決する
E	必要	間接的	直接的	・不適切な行動を制止する
F	不要	観察的	間接的	・遊びについて質問（会話）する ・子どもの思考や遊びを拡張するための質問
G	少し必要	間接的	間接的	・子どもの発言、身振り、行動に反応する ・子どもの遊びの成果について応答する
H	必要	直接的	間接的	・2人以上の子どもの会話や交流を促進させる
I	不要	観察的	観察的	・子どもの遊びを観察する

望ましい保育、実際の保育者の関わりについて表5に示す。

子どもが興味・関心を持った活動に取り組む中で、その活動を継続するために必要とする保育者の関わりという観点から必要性を筆者が判断し、その必要性に対する保育者の関わりについては、子どもが保育者の関わりを必要としていれば直接的な関わり、少し必要としていれば間接的な関わり、不要であれば観察的な関わりが望ましい関わりと言えよう。

以下に、子どもが求める保育者の関わりの必要性和実際の保育者の関わりについて記述する。

子ども A は、砂場の縁に砂の山を作っている。しかし、次第にその砂の山を保育者に見てほしくなり、保育者を意識しはじめると保育者は他の子どもと関わっていたため見てもらえず、自分で作った砂山を投げてしまった。その後、また、砂場の縁に砂山を作り始めた。隣で、同じく砂山を作っていた子ども B に砂山を作って見せて、子ども B から「上手」とほめられた。再度、保育者の近くに行き、また砂山を作って見せたところ、今度は「上手」とほめられた。続けて砂山を作るが、その際も保育者に「上手にできるかな？」などと声をかけられたことで遊びが継続した。子ども A は、自分で遊びを見つけて取り組むことはできるが、その遊びは、保育者が間接的に関わることによって継続した。

子ども B は、道具を使って小さな砂山を作り、1人で砂場の縁に並べていた。子ども A が関わってきても、子ども A の作品をほめたり、子ども A の作品について保育者に声をかけたりして、関係性を作ろうとしていた。その後も、1人で遊びを継続させて集中していた。子ども B は、1人で遊びを見つけて継続でき、友達とも良好な関係性を築くことができるため、保育者の関わりは不要と判断した。保育者は、子ども B の活動には基本的に介入せず、ほとんど目も向けることはなかった。

子ども C は、バケツに砂を入れたりして1人で遊んでいたが、次第に、子ども D の隣で遊び始めた。保育者は、1度だけ子ども C に対して話しかけたあとは見守っていた。子ども C は、1人では遊びが継続しないが、友達と一緒に遊ぶことで継続する。子ども C は、保育者の関わりを必要としないが、友達との関わりは必要であるため、保育者の見守りが必要である。

子ども D は、保育者のとなりに座り、バケツの中で泥水を作っては、ときおり保育者に話しかける。他の友達が集まってくるたびに「こっちに来ないで」と自分の活動が邪魔されないように遠ざけようとして争いになりかけるが、その都度、保育者が制止した。終始、保育者

は子ども D の近くから離れなかったため、子ども D は保育者による直接的な関わりが必要であった。

子ども E は、コップに砂を入れて、ひっくり返して砂山を作っている。途中で飽きてしまい砂場から出ていくが、また砂場に戻ってくる。戻ってきて保育者に話しかけるが、やはり面白くないのか、友達が作った山を壊して回り、保育者から壊さないよう注意される。子ども E は、自分で遊びを見つかるも継続することができず、保育者の関わりを少し必要としていた。保育者は、争いを制止するために直接的に関わっていた。

子ども F は、コップの中に水を入れてきてコップの中に砂を入れて、自分なりに実験を繰り返している。保育者から「なに持ってきたの?」と聞かれ「アップルジュース」と答える。友達との関わりもなく、1人で継続して遊んでいる姿から、自分で遊びを見つけて取り組むことができると言えるため、保育者の関わりを必要としないように見えた。保育者は、子ども F が水の入ったコップを持って近くを通ったときに質問するなど間接的な関わりをしていた。

子ども G は、砂団子を作っては保育者に見せている。保育者はそれに対して共感しながら応答する。子ども G は、何かを作る度に保育者に自分の作品を披露する。子ども G は、1人で活動を始めることができるが、常に保育者の応答を必要としていた。保育者は、子ども G から求められれば、発言、身振り、行動などに反応し、子どもの活動の成果について回答するなど、間接的に関わっている。

子ども H は、遊びを見つかることができていない。なんとか遊ぼうとして、コップを持って、型で砂を抜こうとしたりするがうまくいかず、徐々に保育者のところへ近寄る。子ども H に気付いた保育者が、保育者の隣で泥水を作っていた子ども C と D の活動に参加するよう促すも、子ども C と D に強く拒絶される。その後、他の場所に行き、他の友達の作品に関わろうとするが、それも拒絶され、他の遊び場へ移動する。子ども H は、遊びを見つかることができずに保育者に近寄っていることから、保育者の関わりを必要としていたことは明らかであった。それに対し、保育者は子ども D から離れなかったため、仲間に入るよう促す間接的な関わりに止まっていた。

子ども I は、水場の近くで、1人で泥水づくりに没頭している。ときおり保育者は砂場から観察していた。子ども I は、自分が集中できる遊びを見つけ、砂遊び動画が終わるまで継続的に集中しており、保育者の関わりは必要としないかった。保育者もその様子を見守り、観察的な関わりをしていた。

以上、保育者は、子どもが興味・関心のある活動に集中できるようにあらゆる関わりを実践していた。子どもが遊びを見つけれなかったり、争いに発展したりしそうときは直接的に関わっており、遊びを継続させるための助言やきっかけを必要としていたときは間接的に関わっており、子どもが1人で活動に集中できているときは観察的に関わるなど、おおむね望ましい関わりであった。また、子どもが自立的に活動している場合は、5秒以上の見守りがなく不介入となる場合もあった。表5の通り、子どもの活動に対する望ましい関わりと、実際の保育者の関わりは、9人中5人（A、C、D、G、I）が一致していた。保育者は4つの関わり方を適宜使い分けることで、子どもが活動を継続できるように関わりの内容にできる限り配慮しながら関わっていた。

IV. 考察

本研究では、保育者20人に砂遊びに取り組む9名の3歳児の興味・関心について記述してもらった結果、人物と素材と道具についての記述が多かった。そして、これら3つの子どもの興味・関心要素において9人の子どもたちの関心がどのように異なっているのかについて統計分析し、有意に異なることが明らかとなった。以下に、「子どもの興味・関心の個性と実際の保育者が把握する子どもの興味・関心の関係性」と「子どもの必要性に応じた保育者の関わり方」について考察する。

1. 子どもの興味・関心の個性と実際の保育者が把握する子どもの興味・関心の関係性

子どもの興味・関心は子どもの内面にあるため、子どもの内面をどのようにして捉えるかについては本研究の課題であった。子どもの内面は、幼稚園教育要領（2018）では「意欲や意志の強さの程度」「心情の状態（明るい気分、不満に満ちた状態、気落ちした気分など）」、保育所保育指針（2018）では「子どもの心の動き」「物事に対する意欲」、幼保連携型認定こども園 教育・保育要領（2018）では「意欲や意志の強さの程度」「明るい気分」「不満に満ちた状態」「気落ちした気分」など各要領や指針によって表現は異なるものの、概ね「子どもの心の動きや変化」と置き換えることができる。本研究では、20人の保育者が記述した「子ども心の動きや変化」である興味・関心について分析した結果、砂遊びに取り組む9人の子どもたちの興味・関心は有意に異なっていたことから、たとえ同じ砂遊びに取り組んでいたとしても、子どもの関心はそれぞれ異なることが示唆された。人物・

素材・道具の3つの興味・関心要素のうち、もっとも記述が多かったのは水や泥などの素材（46.9%）であった。次いで、道具（26.8%）、人物（26.3%）と続いた。興味・関心要素の中でもっとも素材に興味・関心を示した子どもは9人中5人であり、人物と道具は9人中2人であった。幼児の砂遊びの場面での発達の特徴を年齢ごとに整理した藤塚（2017）は、3歳児の特徴として、道具の扱いに慣れておらず道具よりも手を使うことを好む傾向が強いこと、手で砂の感触を感じたり、こぼれ落ちるさらさら砂の状態を目で見て確かめたりすることを報告している。また、砂遊びにおいてどのような幼児の育ちが期待され、そのための環境がどうあるべきかを調査した小谷（2013）は、幼児は砂遊びにおいて安定感・解放感・充実感を体感していることを整理した上で、3歳児は裸足になり水を使うことで解放感を味わう姿を記録していることから、3歳児の興味・関心が砂や水などの素材に集中することは自然であると言えるだろう。しかし、年齢による素材への関心の集中を考慮したとしても、他の4人の子どもたちの興味・関心が素材以外にあることから、やはり子どもの興味・関心は個別に異なると言えよう。では、20人の保育者による子どもの興味・関心と、実際に動画の中で保育を実践していた保育者が把握する子どもの興味・関心は、どのように異なるのだろうか。実際の保育者にも動画を視聴してもらい、9人の子どもの興味・関心の自由記述を同様の方法でのテキストマイニングの結果、20人の保育者の記述で「人物」に興味・関心が多かった子どもは、BとHであったが、実際の保育者が記述したBの興味・関心は「バケツで遊ぶこと（道具）」、Hは「型抜きに興味を持つ（道具）」であり、B、H共に人物ではなく、道具であった。同様に、「素材」が多かった子どもは、C、D、F、G、Iであったが、実際の保育者は、Cは「砂の感触を楽しむこと（素材）」、Dは「砂の感触を楽しむこと（素材）」、Fは「水で遊ぶこと（素材）」、Gは「泥団子作り（素材）」、Iは「水道の近くで泥を作ること（素材）」と、全て一致していた。「道具」が多かった子どもは、AとEであったが、実際の保育者は、Aは「型抜きで遊ぶこと（道具）」、Eは「砂の感触を楽しむこと（素材）」であり、Aのみ一致していた。

以上の通り、動画を視聴した20人の保育者と実際の保育者の記述による9人の子どもたちの興味・関心は、9人中6人が一致する結果となった。この結果から、どちらの保育者の子どもの興味・関心の見立てが正確であると考えられるべきなのであろうか。実際の保育者は、その場の当事者であるため、子どもの興味・関心を肌で感じることができる。20人の保育者は、当事者ではない

が客観的に動画を視聴しているものの、そもそも20人の保育者の見立ては一致していない。田代(1995)は、保育カンファレンスを通して、子どもの共通理解が可能になり、保育者間の関係性が高まることなどから、その有効性を確認している。また、Harford & MacRuairc (2008)、Sewall (2009)、Rosaen et al. (2010) とも、ファシリテーターや同僚との相互作用が、カンファレンスの質を高めていることを確認している。つまり、子どもの内面の理解、すなわち子どもの興味・関心の理解については、保育カンファレンスを通して、自分の意見を出したり、自分以外のひとと議論したりすることで、将来の保育が最適化されることを考えると、たとえ実際の当事者であっても見えていない場所や場面があったり、自分とは異なる見解があったりするため、どちらの見立てが正しいということではなく、他の保育者との情報の共有と意見の交換によって導くことが最善の方法と言えるだろう。

2. 子どもの必要性に応じた保育者の関わりのあり方

基本的に、子どもは自分の興味・関心に沿った遊びを見つけて取り組む。それゆえ、表3に示した通り、たとえ同じ砂遊びに取り組んでいたとしても、子どもの興味・関心は一人ひとり異なる。これは、子どもが自分の遊びを見つめることができた結果とも言い換えることができる。では、この一人ひとり異なる子どもの興味・関心に対して、保育者がどのように関わるのが望ましいのかと考えたとき、それは、子どもが興味・関心に没頭できるように保育者が関わるのができれば、その関わりは適切な関わりと言えるのではないだろうか。つまり、子どもが保育者の関わりを必要とすれば直接的な関わり、少し必要とすれば間接的な関わり、子どもが自分の興味・関心に沿った活動に集中できていれば観察的な関わり(見守り)が保育者の関わりとして望ましいであろう。こうした観点から、子どもの必要性に応じた保育者の関わりのあり方について考察する。

9人の子どものうち、保育者の関わりを「必要」としていたのは3人、「少し必要」としていたのは2人、「不要」な子どもは4人であった。

「遊びを見つけれない」、「争いに発展する」など、子どもが保育者の関わりを必要としている場合は、保育者は直接的に関わることが望ましい。保育者の関わりを必要としていたのは、子どもD、E、Hの3人である。子どもDについては、保育者が他児と争いに発展する可能性を制止するなど直接的な関わりによって自分の遊びに集中することができた。子どもEについても、自分の遊びに集中できていないことで他児と争いになりか

けたが、保育者の直接的な関わりによって争いを避けることができた。子どもHは、自分の遊びを見つめることができなかったため保育者の関わりを必要としていたが、保育者が仲間に入るように促すなど間接的な関わりをしていた。保育者は関わりを必要としていた3人の子どものうち2人に対して直接的な関わりをしていた。

「遊びを継続させるための助言を必要とする」「保育者の応答を必要とする」など、保育者の関わりを少し必要としている場合は、間接的に関わるのが望ましい。保育者の関わりを少し必要としていたのは、子どもA、Gの2人であった。子どもAとGが、自分の遊びを継続させるためには保育者の承認を必要としており、保育者は子どもAとGの遊びの成果に共感して見せるなど、その欲求に応答し、間接的に関わっていた。

1人で遊びに没頭している場合は見守りなどの観察的な関わりが望ましい。観察的な関わりを必要としていたのは、子どもB、C、F、Iの4人である。子どもBは、自立的に遊ぶ子どもであったため観察的な関わりが必要であったが、本研究の関わりの定義に当てはめると不介入となった。子どもCも自分の活動に集中していたが、他児との争いへの発展を防ぐために保育者は直接的な関わりをしていた。子どもFも活動に集中していたが、保育者は声をかけるなど間接的な関わりをしていた。子どもIは自分が納得する泥を作るために最後まで水場から離れず、保育者はその姿を砂場から見守っていた。ここで、保育者が質問を投げかけるなどの間接的な関わりをすることも考えられたかもしれないが、砂場と水場が離れていたため保育者との距離を考慮すると適切だったと考える。保育者は関わりが不要であった4人の子どものうち1人に対して観察的な関わりをしていた。

以上のように、子どもが保育者の関わりを必要としたときには「直接的な関わり」、少し必要としていたときには「間接的な関わり」、関わりを必要としないときは「観察的な関わり」が望ましい関わりであるが、筆者が調べた限り、子どもが興味・関心のある遊びを発展させるための望ましい関わりと実際の保育が一致していたのは9人の子どものうち5人であった。

3. 本研究の課題

本研究では、同じ砂遊びに取り組んでいたとしても、子どもたちの興味・関心は子ども毎に統計的にも有意に異なり、保育者の子どもへの関わりも有意に異なることが明らかとなった。

その上で、本研究の課題を2つあげる。1つは、子どもの年齢である。本研究の対象となった子どもたちは全て3歳児と同じ年齢であったが、異年齢の場合や縦割り

保育の場合においても検証が必要であろう。発達が異なる子どもたちによる集団保育においても、当然、子どもたちの興味・関心は異なるが、おそらく保育者が発達の異なる子どもたちの興味・関心を判断することは可能であろう。しかし、本研究と同様に、保育者が子どもの求める関わりができるかどうかは検証する必要がある。また、今回の活動内容は砂遊びであったが、たとえば室内遊びなど他の場面であれば子どもの興味・関心要素も異なるため検証が必要であろう。

もう1つは、保育者の経験年数である。本研究対象であった保育者の経験年数は8年であったが、著者（2022）の調査によると、保育者の経験年数が5年未満の場合は、子どもが誰かと一緒に活動に取り組む姿から子どもたちの興味・関心を判断する傾向があり、保育経験が10年に近づくと、子どもの志向性によって判断する傾向がある。子どもの志向性を読み取ることは、子どもが活動に入る直前の言動から展開を予測することである。したがって、保育者の経験年数が5年未満の場合は、子どもが目的を持って何かに取り組もうとする姿よりも実際の行動を中心に記述する傾向があるため、記述内容が変わる可能性があることから、経験年数による違いについての検証も課題として残るだろう。

注

1. 丸尾ふさ（1927年、東京生まれ）。千代田女子専門学校を卒業後、白金幼稚園にて保育者として従事。著書に「幼児の遊びを集団づくり」（1969）、「幼児の集団生活」（1985）など。

文献

- 浅川蘭子（2009）. 子どもと保育者がともに主体である保育についての検討－自由保育と一斉保育の比較から 植草学園短期大学紀要 10 (0), 67-78.
- Bennet, Wood and Rodgers (1997). *Teaching through play: Teacher's thinking in classroom practice*. Buckingham, UK: Open.
- Biber, B. (1984). *Early education and psychological development*. Yale University Press.
- 藤塚岳子（2017）. 幼児期における砂遊びに関する一考察－3、4、5歳児の比較を通して－ 東海学園大学教育研究紀要 2

- (1), 105-113.
- Freud, S. (1961). *Beyond the pleasure principle*. New York: Norton.
- 橋村晴美（2022）. 幼児教育における集団保育の役割－領域「人間関係」からみた主体性を育む保育のあり方と指導計画の連関－名古屋短期大学研究紀要 60, 91-98.
- Harford, J. and MacRuairc, G. (2008). Engaging student teachers in meaningful reflective practice. *Teaching and Teacher Education*, 24 (7), 1884-1892.
- Harper and McCluskey (2003). Teacher-child and child-child interactions in inclusive preschool settings: Do adults inhibit peer interactions? *Early Childhood Research Quarterly*, 18, 163-184.
- 厚生労働省（2018）. 保育所保育指針解説.
- 小谷宜路（2013）. 幼児教育における「砂場」の教育的意義に関する研究：幼児の育ちを捉える視点と環境を構成する視点 埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要 12, 45-52.
- 文部科学省（2018）. 幼稚園教育要領解説.
- 内閣府・文部科学省・厚生労働省（2018）. 幼保連携型認定こども園 教育・保育要領解説.
- Parten, M. B. (1933). Social play among preschool children. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 28 (2), 136-147.
- Rosaen, C. L., Lundeberg, M., Terpstra, M., Cooper, M., Niu, R., and Fu, J. (2010). Constructing videocases to help novices learn to facilitate discussions in science and English: How does subject matter matter? *Teachers and Teaching: Theory and Practice*, 16(4), 507-524.
- 穴戸健夫（2017）. 日本における保育カリキュラム歴史と課題 新読書社, 206-210.
- Sewall, M. (2009). Transforming supervision: Using video elicitation to support preservice teacher-directed reflective conversations. *Issues in Teacher Education*, 18 (2), 11-30.
- 角谷詩織・梅川智子・亀山亨・渡邊典子（2017）. 幼児の協同的問題解決能力を育む「遊び込み」－量的データと保育実践研究データの統合による考察－国際基督教大学学報, I-A 教育研究 59, 63-76.
- Trawick-Smith and Dziurgot (2011). 'Good-fit' teacher-child play interactions and the subsequent autonomous play of preschool children. *Early Childhood Research Quarterly*, Early Childhood Research Quarterly, 26 (1), 110-123.

付記

開示すべき利益相反状態はない。

Nursery Teacher's Behaviors in the Individuality of Children's Interests : An Analysis of the Locations of Interests of Three-Year-Old Children Playing in the Sandbox

Joe Sadamatsu

Osaka University of Comprehensive Children Education Graduate School

In this study, nine children and one nursery teacher were filmed in a sandbox. 20 nursery teachers watched the video and wrote down their impressions of the children's interests. The children's interests were classified into three categories: "People" such as friends and teachers, "Material" such as sand and water and "Tools" such as buckets and cups. A statistical analysis of those three interests revealed that children's interests were significantly different, and nursery teacher's behaviors toward children's interests were also significantly different. Therefore, it is suggested that information sharing and an exchange of opinions between nursery teachers is necessary to understand children's interests. In addition, the type of involvement that a child requires from a nursery teacher in order to concentrate on an activity were classified into three categories: "Much need," "Some need," and "No need." Then, the nursery teacher's involvement with the child was classified into four categories: "Direct guidance," "Indirect guidance," "Observation" and "No interaction." The relationships between the needs of the children and the guidance of the nursery teachers were examined, and in conclusion, "Direct guidance" was desirable in the case of "Much need," "Indirect guidance" for "Some need," and "Observation" for "No need." The nursery teacher in the video provided suitable childcare to five of nine children.

Key words : sandbox, interest, direct guidance, observation, personalize

